

平成 22 年度 第2回 CCC コミュニケーション学グループ運営委員会 議事概要

I. 日時 : 平成 22 年 9 月 24 日(金) 16 時 00 分から 18 時 00 分まで

II. 場所: 私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者 : 阿部委員、中西委員
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、渡邊職員

IV. 議事概要

冒頭で、読売新聞コピー、デジタル教科書、学ぶ力についての記事の紹介。本日の検討事項の確認(資料配付)

トピック1: の「授業のねらい」について簡単に検討した後、前回合意された到達目標1～3について、具体的な授業モデルについて自由に意見交換を行った。以下に要約する。

: コミュニケーションの事象を客観的に考察する。コミュニケーション学は他分野ではツールとなるもののメカニズムを学ぶ。実践的＝応用できる力を重視すべき。

: グループワークそのものが、コミュニケーションスキルを学ぶ場である。

: 他のグループの観察によって学ぶことも可能。参与観察。客観性の確保。到達目標の3は、理論や概念を学ぶ、1, 2は実践の中での学習が中心となる。

: 確かに、体験学習的なものがスキルの学習には必要。

: 1と2で一つの授業モデル、到達目標の3は別の授業モデルになるだろう。コアカリキュラムのイメージに基本モデルを重ね合わせる。理論的なモデルや原則に基づく実践が重要。

実際に試して、経験させるのが到達目標の1と2。より効果的なコミュニケーションのアプローチを学ばせるような授業モデル。

: どんなコミュニケーションが効果的か、それはなぜか？を教える。コミュニケーションのメカニズムを理解することによって、自分の文化のコミュニケーションについても、客観的に考察する。

: やはり、文化相対主義の考え方が重要であろう。コミュニケーションはプロセスである。結果に至るまでの道筋には複数あることを教える。

: カリキュラムとしては、理論とスキルは一体となるべき。

: 当たり前のことを理論的、客観的に考えることの重要性を学生に理解させることが難しい。

: ケーススタディーを使って、批判的に内容を分析させる事は必要。

: 自身の成功談、失敗談の分析をグループでやらせる。ICT がコミュニケーションの場になっている。ICT を使ったコミュニケーションの長所・短所を実体験に即して学ぶ。現実と仮想現実でのコミュニケーションの差違に気づかせる。

: コミュニケーションには文化の違いも関係するだろう。さらに、公共性の問題、メディアリテラシーの問題も含めて、各メディアの違いや特性の理解、そしてより高度なメカニズムの理解のために到

達目標の3が必要。

トピック2: 易しいことを理論的に考えさせるための授業のデザインの検討。

:メカニズムを理解させるために理屈を教える。メディアリテラシー教育の実践。自分で何かを制作させる。ICTを含め、今後の技術革新によって、様々なツールは使いやすくなるだろう。観察や体験学習もやりやすくなるだろう。

:体験し、自ら問題を発見し、解決する学習課題を強調する。理論を実践に意識的に結びさせる。理論で説明させることを授業のねらいとする。

ここで、終了時間が来たため、具体的な授業モデルについては継続審議。次回、11月予定。3委員が全員参加できるように日程調整をする。

V. 次回の開催日程

日時：平成22年11月頃

場所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

以上